
さくらの出会い

風花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さくらの出会い

【Nコード】

N4822L

【作者名】

風花

【あらすじ】

人気投票と一番だったさくらと主人公レインの出会いと一つの事件を通して決意したさくらの思い。どうぞ

さくらの出会い

今日は。東條さくらです

最近、私は本編に出ていませんが人気が高くて嬉しいです
ところで、みんな私が何でレン君の事があんなに好きか知っていますか？ 知りませんよね

そこで今回はそれを教えたいと思います

——あれはそう……十四の春だったかな？

私は三傘学園付属中学二年に進級したその日にレン君が転校（昔は
そう言われていたけど本当は森羅たちに誘われて無理やり入ったって
教えてくれたんだよね）してきたの

その時の私はまだ、好きっていう感情なんてこれっぽっちもなくて

「うわゝ、黒いなゝ」

ぐらいだったかな？

しかもその時のレン君の自己紹介も

「……飛波レン……俺に話しかけないでくれ」

そんな感じでみんなから反響を買ったんだよね…

それでも森羅や咲ちゃんを筆頭にみんなが色々質問したりしたけど…

「…黙ってくれ」

って言ってどんな質問にも答えてくれなかった

それでもそんな事お構いなしといったように生活が始まったんだよね

それから数ヶ月経ったある日の下校の時：

「もーっ！なんでこんなに重いのもーっ！！」

私は当時所属していたオーケストラ部の練習するためにチェロを持ち帰っていたんだけど：それがとても重くて重くて、学園から数百mのところまで座り込んだ

「：はあーっ。家で練習するなんて言わなきゃよかった」

そう呟いて休憩していると学園の方からレン君がやって来た
私は横眼で見てすぐに下を向いた。だって苦手なんだったもん
だけどレン君は私を見つけるとすぐそばまで来ると話しかけてきた

「：何……してるんだ？」

「：別に。休んでいるだけだよ」

「：……そうか：」

そう言うのとレン君はいきなり私の横に置いてあったチェロをヒョイと担いだ。そして

「：家は……？」

って聞いてきた。もちろん私は驚いて断ろうとしたけどレン君は「……ここで休んでいるという事は……重いから……」って言ってさっさと歩いて行っちゃった。私の家と正反対の道にその時私は「レン君って実はお節介？」などと思いながらレン君を追いかけた

——それから一年

レン君はその一件以来、帰り道で会うと必ずチェロを運んでくれて、しかも何気なくチェロの苦手な所を話したら丁寧に教えてくれた（その時、ためにしに弾いてもらった時は驚いた。だっていつも練習している私より上手なんかも）。その間にレン君と森羅と咲ちゃんと一緒に帰って楽しかった

だけど……

それをあまりよく思わない人たちがいたんだよね

レン君の事が好きだけどその気持ちを言えない女の子達

咲ちゃん（当時は知らなかったけど私も）の事が好きな男子

その両方が私たちを嫉妬した。嫉妬し続けそれは危害を加えるほどにもなった

でもまだそれはよかった。そういうものはしばらくすれば自然と消えていくから

だけどまだあまり消えていない日の放課後……

「うーちよつと練習しすぎたな。真っ暗だよ」

そう言って私は暗い夜道を一人歩いていった。あまり街灯は無くって凄く怖かった

早歩きで家路に向かっていたその時、

「あれれ？君、こんなところでなにやってるのかな？」

「先輩、アレっすよ。きっと彼氏の家で遊んでいたんスよ！」

「きゃははは！こんな年で遊ぶとはね」

いかにも大学生である服装をした男たちに絡まれてしまった

私はどうにか帰ろうとしたけどぜんぜん帰してくれない

そればかりか私はいつの間にか家の少ない路地裏に連れて行かれていた

「あ、あの！急いでいるんです。帰してください！！」

勇気を振り絞って叫ぶがそれは逆効果だった

「急いでいる？そんな君がなんでこんな遅くまで外にいたのかな？おかしいね」

「おかしい、おかしいっす。絶対、男と遊んでいたんスよ」

「それなら俺らと遊ばない？もちろん君を使って遊ぶけどね」

男たちは下品に笑いながら私に手を伸ばしてきた

私は姿勢を低くして眼を瞑りながら何故かこう思った

（助けて！レン君！！）

と

その時、まるでアニメみたいに私に手が届く瞬間に声が響いた

「…よせ！」

男たちの手は一旦引っ込められそれにつられて私も声のした方を見た。そこにはなんとレン君がいつもの黒コートの姿で立っていた。だけどその表情はいつもの無表情じゃなく怒りが現れていた

「……そいつから離れろ……この下郎」

「なんだあ？このガキ」

「とつても黒いっスね。かつこつけっスか？」

「デメエみたいながキ用なんかねえよ。消えろ！」

男たちは口々にレン君に汚い言葉をかけるけどレン君は表情を変えずに私たちに近づいた

「だから…：てめえなんか用ねえっツツてんだろ！！」

一番年配の男がレン君を押し壁に叩きつけた。それを合図に残りの二人が笑いながら蹴り始めた
ひっ！や、止めて！

レン君はそれを反撃することなくただ蹴られていた。なんで？なんで反撃しないのレン君！？

「ふん。デカイ口叩く割に呆気ねえな」

「お前なんか家に帰ってママに甘えるっスよ！」

「きやはは。それいいな」

そう言って男たちはレン君を置いて私に近づいてきた。だけどその時、小さいけどしっかりとしたレン君の声が聞こえてきた

「……………った」

「ああ？」

「聞こえないっスよ」

「…今、何て言った」

「お前なんか家に帰ってママに甘えるって言ったんスよ！」

その言葉にレン君はゆっくりと立ち上がると顔を俯かせて呟いた

「…お前達みたいなの……悠々と両親と生きてきた奴に…」

そしてレン君は

「俺の何が判るんだ!!」

…怒った。多分私が初めてみた感情だったかもしれない
レン君は怒りのまま突撃すると素早い身のこなしで一人の頭を蹴りつけた

その人は頭を蹴られた反動で壁に激突し気を失った

「っテメェ!!」

語尾に『ス』とつけていた男は怒ってレン君に向かったけどレン君は簡単にその男を地面に陥没させた

年配の男はレン君に怒りと恐怖した表情を見せるとポケットからナイフを取り出して叫びながらレン君に向かって走っていった

「レン君。危ない!!」

私は出せるだけの声を出してレン君に叫んだ。レン君は反応して男の方を向いたけど間に合わず刺されてしまった
私は恐怖に悲鳴を上げて男はへんな笑いをした
だけど次に聞こえてきたのはレン君の悲鳴なんかじゃなく……

キン!

という金属の音だった

「…何？」

「…俺だって本当の母さんに甘えてみたかった。だけど捨てられた時点でそんなことなんてできないんだ。自覚しているから自分で言っても我慢はできる。だけど……」

レン君はゆっくりとこれまでで一番長い台詞を言いながら男のナイフを防いだ物を取り出した

それは夜の中、とても紅く綺麗に輝く日本刀だった

男はヒィッと情けない声を出すと尻餅をついた。なんか良い気味だけど私はそれを考えている暇は無かった

だってレン君が今にもその日本刀を男に振りかざそうとしていたから

「…だけど、俺の事をなんにも知らない奴に言われるのだけは我慢できないんだよ。だから…」

——死ね

レン君はそう言うと言とうと日本刀を振り下ろした
私は無我夢中で叫んでいた

「レン君。もう止めて!!」

その言葉が響いた瞬間、レン君は日本刀を止めた。本当にギリギリで首の一ミリのところでピタリと止めレン君は私を見た。その眼はいつもの無表情に変わっていた

「大丈夫だよ。私はもう大丈夫。だから…だからもう良いんだよ」

私は今言える精一杯の言葉をかけるとレン君は刀をコートの中に隠して私のところに駆け寄った。そして…

「…よっ…」

「え…?」

私に許可をとることもなくおぶった。びっくりしたけど不思議と嫌、
っていう気持ちはわいて来なかったかな?

無言で暫く歩いているとレン君は話しかけてきた

「…ごめん」

「え?」

「…お前が止めてくれなかったら…俺はあの男を殺していた」

そんなこと…

「いいよ。レン君は私を助けようとしてやったんだから」

「…そうか。…お前は優しいんだな…なんとなく嬉しい」

マンガとかによくこう言った言葉で恋に落ちるけどまさか本当に落ちちゃう言葉があるなんて…意外だった。とにかく今の言葉に嬉しかったけど一つ訂正しなくちゃ

「レン君。違うよ」

「……え？」

「私はお前なんかじゃないよ。私はさくら。東條さくらっていう名前があるからそう呼んで」

「……さくら…」

……マンガみたく言葉で簡単に落ちちゃうのは世界中で私だけかな？そんなことを考えていながら私は家に着くまでの間レン君に対してちよつと決意ができていた

あれから私は森羅からレン君について教えてもらった

レン君は教会出身だった事は意外だったけど私はそれほど驚かなか

った。むしろ納得していた

『お前達みたいな悠々と両親と生きてきた奴に俺の何が判るんだ！』

その言葉はそんなに私には判らない。だけどレン君はそれで悩み傷ついている

だから私は一つ決意した

——私をレン君が守ってくれたようにレン君を私が支え守りたい

それから4、5年が経った

私はアレ以来レン君に積極的に話しかけたり遊んだりしている
だけど：それをストーリーカーって言う人がいるのよね。ちよつと度が
過ぎる時はあるかもしれないけどそれでも私はレン君に頼ってもら
いたい。支えてあげたいっていう気持ちがあるからなんだよ？

でも少し前レン君の周りにお邪魔虫が現れた

フリー・アスハ

レン君の事を好きらしくいつも私と張り合っていた。今はレン君の
ところにいないけどそのレン君もいない。ううっさびしいよ

ピピピピ（さくらが携帯を操作している音）

「……もしもしレン君!？」

我慢できなくて電話しちゃいました

『…さくらか。どうした』

「うん。今レン君はどこにいるの？」

どこかな? 行ける場所だったら行きたいな

『今はフェ…フリーの通っている学校だ』

え…………

な、なんですって……!!

「な、何でそんなとこにいるのかな?」

へ、平静を保つのよ私

『色々あってな。すまないが帰るのは少し後になる』

「へへ。12月24日には帰ってこれるかな?」

その日は大切だから…
だけど…

『すまない。無理だ。雪祭りには間に合う…と思う……授業が始まる。じゃあな』

そう言うとレン君は電話を切った

.....

そんなああああ!!

その場に響いたのは私の声とカラスのアホー声だった

(後書き)

こんな感じですね

何か希望（森羅の過去とか紅也の日常とか）がありましたらどうぞ
ゆっくりですけど書きます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4822/>

さくらの出会い

2010年10月21日21時05分発行